

聖書: エステル記5章1～8節

説教: 王の好意を得た

はじめに

ペルシャ帝国に在留のユダヤ人として生まれたエステルが、クセルクセス王に見初められて王妃となったとき、エステルを育ててきたモルデカイは、このようなことがどうして起こったのか、神に問い続けますが答えがないまま五年の月日が過ぎていったとき、思いもかけなかった大きな事件が起きます。王の側近であるハマンが、モルデカイに対する恨みから、ペルシャ帝国全土に住んでいるユダヤ人を虐殺するとの法令を、王の名前で発布したのでした。これを知ったモルデカイは灰をかぶり粗布をまとい、エステルのところに出向き、「ユダヤ人を救うために王からのあわれみを乞い求めなさい」と言うのですが、エステルは決断できない。それでモルデカイは、「あなたがあのとき王妃となったのは、実はこの時の備えだったのではないか」と語って、神のご計画に目を留めるように促すのです。エステルは悩み苦しんだ末に、「法令に背くことですが、私は王のところへ参ります」と語った。それが前回までのあらすじでした。

そのエステルはどうしたのか。目的を果たすことができたのか、それともそうでなかったのか。そのとき、神はどのように関わっておられたのか。そのことを考えて参ります。

1 王との対面

1) 命をかけて王の前に出る

エステルが悩んだのは、「召されていないのに奥の中庭には行って王のところに行く者は、男でも女でも死刑に処せられる」という法令があって、勝手に王の前に出ようとするなら殺される可能性があったからでした。もちろん、王が金の笏を差し伸ばせば助かるという道はあるにせよ、そうするかどうかは、まったくわからない。エステルは「死ななければならないのでしたら死にます」と覚悟を決め、スサの都にいる全てのユダヤ人に断食と祈りをしてもらうようお願いをし、自らも断食して三日間を過ごし、王の前に行きます。

2) 王の好意を得た

王はどうしたか。2, 3節。「王が、中庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を得た。王は手にしている金の笏をエステルに差し

伸ばした。エステルは近寄って、その笏の先に触れた。王は彼女に言った。『どうしたのだ。王妃エステル。何を望んでいるのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。』」

幸いにして王の好意を得て、エステルは殺されずに済みました。ああよかったと胸をなで下ろすところです。さてここで考えたいと思います。なぜエステルは王の好意を得ることができたのでしょうか。2章に、エステルは美人であったとか、王はほかのどの女よりもエステルを愛したとあったので、それでエステルは大丈夫だったのだ、ということなのか。そういうこともあったでしょうが、それだけだというのなら単なるおとぎ話に過ぎません。なにか別の理由があるはずですよ。

3) エステルの姿

エステルの立場に立ったなら、普通の女性は何をするでしょう。王さまに気に入られるように一生懸命着飾って、きらびやかな宝石を身にまとい、香水やら化粧をしっかりと整えて王の前に行くはずですよ。ではエステルはどうしたか。三日間断食した。そうしたらどうなるか。どんなに化粧をしてもどことなく顔色が悪いし、やつれてしまう。では衣装でごまかしたか。いいえ、そうはしません。なぜわかるか。

話しは少しさかのぼって、エステルが王妃に選ばれるかどうかの最終面接に臨んだときのことです。2章15節。「エステルが、王のところに入って行く順番が来たとき、彼女は女たちの監督官である、王の宦官ヘガイの勧めたもののほかは、何一つ求めなかった。」ほかの女性たちは精一杯着飾るために努力したのに、エステルだけはそうしない。エステルはそういう女性だった。ここでも、王妃の衣装は着たけれど、王が喜ぶようなものを着ようとは考えなかった。それなのに、エステルは王の好意を得ることができた。不思議に思いませんか。

もう一つの不思議がある。エステルを見たクセルクセス王の頭には、かつてのワシュティの事件のことが浮かんだのではないか。王妃が王の命令に背くことは絶対にあってはならない。それがワシュティ事件の教訓だった。ところがエステルが法令を破ったのですから、ワシュティにした以上の厳しい処罰を下さなければならないはず。ところがふたを

開けてみると、予想とは反対にエステルに非常に好意的なことばをかけた。

4) 奇蹟

なぜこんな奇蹟のようなが起きたのでしょうか。必ず理由がある。1節をもう一度読みます。「三日目になり、エステルは王妃の衣装を着て、王室の正面にある王宮の奥の中庭に立った。王は王室の入り口の正面にある王宮の玉座に座っていた。」中庭をはさんで、エステルが中庭の入り口に立ち、王はその正反対のところにある玉座に座っていますから、王は真正面からエステルの姿を見えています。そのとき王は、エステルに普通ではないものを見たのではないか。心になにかを秘めて悲しい顔をしているのはもちろん、王でさえも心を動かされるようなものを感じ、それを見た瞬間、エステルを咎めたり処罰する気持ちはどこかに消えてしまったのではないか。

エステルが演技をしているわけではないのです。いや、人の目にはむしろみすばらしく見えるほどだった。それなのにこのようなことが起こる。人の技とか計画というのではないのです。エステルを通して神が働いてくださっているのではないか。だから王の心が動かされていく。おそらく玉座から立ち上がってエステルに駆け寄りたかったのではないか。でもさすがにそれはできないので、こう語りかけた。「どうしたのだ。王妃エステル。何を望んでいるのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」6節でも同じことばを繰り返していますから、これは決まり文句とかではない。本心からエステルを気遣っているように感じます。そのように王の心を動かしていたのは神なのです。

2 エステル

1) なぜ最初の宴会で話さなかったのか

これまで王の心動きに目を留めてきました。ではエステルはどうだったのか。ユダヤ人の救いのために、殺される覚悟をして王の前に出て行ったら、意外にも王はエステルのことを非常に心配してくれて、優しくいたわってくれました。これには驚いたでしょう。そして、神がこのことを導いておられると確信し、思い切ってこう切り出します。4節。「もしも王様がよろしければ、今日、私が王様のために設ける宴会にハマンとご一緒にお越しください。」

それで王とハマンが宴会にやってきた。ここで皆さんは予想するはずです。エステルは、この宴会の席でユダヤ人を救って下さいとお願いするにちが

いない。ところがエステルは何もしないで、8節後半でこう言う。「私が設ける宴会に、もう一度ハマンとご一緒にお越しください。そうすれば、明日、私は王様のおっしゃったとおりにいたします。」

不思議に思いませんか。一刻も早く恐怖におのっているユダヤ人たちを救いたいと思うならば、ぐずぐず先延ばししないで、すぐに用件を切り出すべきです。ところがもういちど宴会を設けて、その時話しますからと明日に延ばしてしまう。なぜだろうか。

2) ハマンを追いつめる証拠がない

理由がある。王の法令は一度発布したら、どんなことがあろうとも、たとえ王であろうとも取り下げることができません。それがペルシャ帝国の決まりでした。そうしますと、ハマンが企てたユダヤ人虐殺計画を阻止するためにどうしたらよいか。一度出した法令を取り下げることができないのですから、以前に出した法令が無効になるような新たな法令を出してもらえない。だったらすぐに新しい法令を出してもらえば良いではないか、と思うでしょう。そうはいきません。なぜならハマンは王の右腕として最も信頼している側近です。そのハマンが考えついた計画をくつがえすような法令を出してくださいと言うのです。ハマンは間違っていた、ハマンは王にとっては悪い部下であるというのと同じです。なんの証拠もなくそんなことは言えない。どうしても、ハマンが悪者であることを示す決定的な証拠を王に見せる必要がある。では、エステルは証拠をもっていたか。いいえ、何も持っていません。手ぶらで王の前に出て来たのです。

もちろんエステルは、王の前に出る前に三日間断食しながら一生懸命考祈った。ハマンを訴える証拠を与えてください。ところがどんなに祈っても与えられない。

ここで私たちは初めてエステルの苦しみがどれほどだったのか、気がつくのです。エステルは二つのことで苦しんでいた。王の前に出たら殺されるかもしれない。そして、たとえ王に許されたとしても、ハマンを訴える証拠がない。そのような苦しみです。

3 神にゆだねる信仰

でも時間の猶予はありません。三日と決めて、その期限が来た以上、エステルはゆだねるしかない。必ず神は何らかの方法でハマンが悪者であるとの証拠を王に示してくださるに違いない。それで

最初の宴会に臨んだ。ところがやっぱり何も起きない。空振りです。証拠がない以上、本当の願いを言い出すわけにはいかない。おそらくエステルは困ったはずです。それで、次の日もう一度宴会を開きますから、そのとき願いごとをお話ししますと、言うしかなかった。ギリギリのところをおりながら、エステルはなお神にゆだねていきます。

エステルを通してイエス・キリストが歩まれた道を思い起こします。十字架におつきになったとき、必ず父なる神は救って下さると信じていたけれど、どこにも救いはなく、苦しみの末に死んで行かれました。人の目には信じてても道は閉ざされ、結局救いはないのだと見えました。しかしそうではなかった。この方が三日目によみがえられたとき、神を信じる者が歩む道は絶対に行き止まりとか、閉ざされてしまうことはない。必ず救いをいただくことができるかと教えてくださった。

私たちが歩む道はときには真っ暗に感じられるときがあります。足がすくんで一歩も進めないときもあります。けれども、そのときは何も見えなくても神に信頼して一歩踏み出したとき、暗くて今まで見えなかったところに光が射してくることがあります。ああここに道があったのだ。けっして道を踏み外したのでもないし、迷ってしまったのでもない。神がこの道が備えてくださったのだと思えるときが来る。いまは見えなくても、この先に神の助けが必ずあると信じながら、とも歩んで参ります。